

大阪インターナショナルチャーチ：ブルース・アレン牧師
ヨシュア記 21 章 1 節-2 節；ヨシュア記 22 章 1 節-5 節，22 章 10 節-27 節，
22 章 30 節-33 節；ヨシュア記 23 章 1 節-5 節（MEV）版 注釈除く

2025/11/02

メッセージ：忠実の遺産

O I Cの皆様おはようございます。天の父なる神様の家へようこそ来られました。

このメッセージでは、「忠実の遺産パート 1」という題で、ヨシュア記の学びを続けていきます。

前回の私のメッセージで、ヨシュアがどのようにして約束の地カナンの地域をイスラエルの 12 部族（または氏族）に割り当てたか、そして神様が「逃れの町」を定められたことによって示された神様のあわれみについてお話ししました。

神様は今もなお、罪人がイエス様のうちに逃げ所を見いだすことができるようにあわれみを与えておられます。そのため、前回の私のメッセージには「イエス様-私たちの逃げ所（JESUS, OUR REFUGE）」という題を付けました。

そして私のメッセージの最後に、罪人がイエス様という逃げ所を見いだすように招きの言葉をお伝えしました。

もし、あなたの心の深いところで神様があなたを動かし、イエス様の十字架のもとへ行きたいという思いが与えられているなら一主の聖餐式の後に、“Lift” のサインのところまでお越しください。

そこには、あなたのために共に祈ってくれる人が待っています。

もう一度、この神様の恵みへの招きを繰り返します。

このメッセージの後、聖霊なる神様があなたの心に働きかけておられることを無視しないでください。

礼拝の後、“Lift” のサインのところで祈りのパートナーとお会いください。

今日は、ヨシュアが 110 歳で亡くなるに至る出来事を振り返っていきます。

これらの出来事の流れや雰囲気、そして劇的さは、かつてのヨシュアの歩み一すなわち、神様による召し出し、渡ることのできない川を渡って約束の地に入ったこと、打ち倒すことのできない城壁を崩したこと、そして打ち負かすことのできないほどの大軍を打ち破ったこと—それらに比べると、ずっと穏やかで静かなものです。

カナンの地に平和が訪れたこの時点でのヨシュアの遺産

ここで、ヨシュアの召しに関する 4 つの主要なテーマをまとめて振り返ります。

1. ヨシュアの召し

私のメッセージ：「勇気とともに広がる人生（Life Expands with Courage）」
〈2025 年 2 月 9 日〉

2. 渡ることのできない川を渡る

私のメッセージ：「越えられない川（Uncrossable Rivers）」

〈2025 年 3 月 30 日〉

3. エリコの動かぬ城壁を打ち倒す

私のメッセージ：「私たちの壁が崩れ落ちる (Our Walls Come Tumbling Down)」

〈2025 年 4 月 27 日〉

4. 打ち負かすことのできない大軍を打ち破る

私のメッセージ：「巨人との戦い (Fighting The Giants)」

〈2025 年 5 月 11 日〉

ヨシュアがイスラエルの民に最後の説教を語ったとき、その中で彼が多くの方で深い知恵を身につけていたことが分かります。ヨシュアが多くの方で深い知恵を身につけていたことはイスラエルの神様との将来と希望にとって最も重要なことでした。

レビ族の祭司たちは住むための牧草地を与えられる

＜ヨシュア記 21 章 1 節-2 節＞を読みます。

＜ヨシュア記 21 章 1 節-2 節＞

1 さて、レビ族の指導者たちはシロに向いて来て、祭司エルアザルやヨシュア、および他部族の族長に相談を持ちかけました。

2 その申し出は、「主がモーセによって指示なさったことだが、われわれにも住む家と家畜用の放牧地とを確保してもらいたい」というものでした。

ヨシュアによって神様がカナン全土にわたって多くの町をレビ族の祭司たちに与えられます。その中には「逃れの町」もいくつか含まれていましたが、多くの町はそうではありませんでした。これは、神様の民へのあわれみでした。すなわち、人々が遠くまで旅をせずとも祭司に会いに行けるようにされたのです。もしそうでなければ、人々は移動式の幕屋まで旅をする必要があり、後の時代にはエルサレムの神殿まで行かなければなりませんでした。

東の部族たちが祭壇を築く — それは罪か、礼拝か？

＜ヨシュア記 22 章 1 節-5 節＞を読みます。

＜ヨシュア記 22 章 1 節-5 節＞

1 さてヨシュアは、ルベンとガドの各部族、マナセの半部族からなる一隊を召集し、

2・3 こう語りました。「みんな、主のしもべモーセの命令をよく守ってくれた。また、私が語った主の命令も、ことごとく守ってくれた。戦闘がこんなに長引いたにもかかわらず、仲間の部族を見捨てず、よく戦ってくれた。

4 今われわれは、主のお約束どおり、勝利と安息を手に入れたのだ。さあ今、主のしもべモーセが与えた、あのヨルダン川の向こうの地へ帰るがよい。

5 これからも、モーセが与えたすべての律法を守り続けなさい。いのちの限り主を愛し、あなたがたのための主の計画に従い、主にすがり、主に熱心に仕えなさい。」

これらのイスラエルの民は、ヨルダン川の東側に家族と家畜を残していました。

彼らは他の部族たちと共に、カナン人との戦いに参加しました。そしてカナン人の生き残りがいるとはいえ今、地に平和がもたらされたので、彼らはヨルダン川を渡って自分たちの家族のもとへ帰るため任務を解かれます。このときヨシュアは、単なる軍の指導者としてではなく、預言者的指導者としての務めを怠りませんでした。彼は＜ヨシュア記 22 章 5 節＞にあるように、彼らを励まし、忠告します。

＜ヨシュア記 22 章 5 節＞

5 これからも、モーセが与えたすべての律法を守り続けなさい。いのちの限り主を愛し、あなたがたのための主の計画に従い、主にすがり、主に熱心に仕えなさい。」

しかし、新たな問題が＜ヨシュア記 22 章 10 節-14 節＞に見られるように起こります。

＜ヨシュア記 22 章 10 節-14 節＞

10 ところがヨルダン川を渡る寸前、まだカナンの地にいる時、彼らは、だれの目にも留まるほど大きな、祭壇をかたどった記念碑を建てたのです。

11 このことを伝え聞いた他のイスラエル人は、

12 シロに全軍を集結し、戦いを交える構えを見せました。

13 それで、まず祭司エルアザルの子ピネハスを団長とする代表団を送ることにしたのです。一行はヨルダン川を渡り、ルベン、ガド、マナセの各部族と話し合うことにしました。

14 この代表団には、十部族の族長の家から一人ずつ、十人が加わっていました。

祭壇を築くというこの行為は、最初は主なる神様に背く行為であると見なされました。

さらに＜ヨシュア記 22 章 15 節-20 節＞を読むと、

＜ヨシュア記 22 章 15 節-20 節＞

15 ギルアデに着いた一行は問いました。

16 「主の国民である私たちは、なぜ君たちがイスラエルの神に罪を犯すようなまねをしたのか、ぜひとも知りたい。なぜ主から離れ、反逆のしるしである祭壇を築いたのだ。

17 ・ 18 私たちがかつてペオルで犯した罪を覚えているか。そのために、あれほど大きな災いが下ったというのに、まだあの罪はぬぐい去られていなかったというわけか。あんなことなど問題ではないと言うつもりか。それで、また反抗するのか。わかっているのだろうか。君たちが今日、主に反逆すれば、明日、全員に主の怒りが燃え上がるだろう。

19 この地が汚れているので祭壇が必要だというのなら、川向こうの幕屋のある私たちの地に来るがよい。私たちの土地を君たちと共有にしてもかまわないのだ。主の祭壇はただ一つだ。ほかに祭壇を築いて、主に反逆するようなまねはやめなさい。

20 まさか忘れてはいないだろう。ゼラフの子アカンのことだ。彼一人が罪を犯したために、イスラエルの全国民がきびしく罰せられたではないか。」

たとえ 1 人の人がペオルの罪やゼラの子アカンの罪のような罪を犯して反逆したとしても、その罪によって主の怒りが全イスラエルの部族に及ぶことが重要な点として示されています。イスラエルの民が犯したペオルの罪については、＜民数記 25 章 1 節-4 節＞に記されています。

＜民数記 25 章 1 節-4 節＞

1 さて、イスラエルの民がモアブのシティムに野営していた時のことです。青年たちの何人かが、土地の娘とふしだらな関係を持ち始めました。

2 モアブ人の信じる神々にいけにえをささげる儀式に加わるようそそのかされ、彼らは宴会に連なるばかりか、ほんとうの神でない偶像を拝むようになりました。

3 やがてイスラエル人は、ペオル山で、進んでモアブの神バアルを拝むほどになったのです。主の怒りが燃え上がったのは言うまでもありません。

4 そこで、主はモーセにきびしく命じました。「族長たちを死刑にせよ。白日のもとで、さらし者とするのだ。そうすればあなたがたを赦そう。」

また、アカンがエリコの戦いの際に分捕り物を取った不従順のゆえに、神様の怒りがイスラエル全体に下りました。いずれの場合にも、罪を犯した者たちが処刑され——木にかけられて殺され

るか、あるいは石打ちにされて死ぬまでは——神様はその怒りをイスラエルの共同体全体から取り除かれませんでした。

キリスト教会における神様の怒りとは？

現代のイエス様を信じる者たちは、しばしば神様のご性質が変わらないことを忘れがちです。神様は今もなお、罪に対して怒りを持たれるお方です。確かに、今は「恵みの時代」であり、罪人が生かされ、イエス様に会うために憐れみと恵みが与えられています。したがって、イエス様を通して与えられる恵みのゆえに、神様はその怒りを抑え、彼らの罪を数え上げずにおられるのです。

しかし聖書はもし人がこの恵みを拒むなら、神様はその罪人に対する怒りを「蓄えておられる」と明確に語っています。このことについて、聖書は＜コリント人への手紙Ⅱ 5章19節＞で次のように述べています。

＜コリント人への手紙Ⅱ 5章19節＞

つまり、キリストによって、この世をご自分と和解させ、その罪を数え立てずに、かえって帳消しにしてくださったのです。これが、人々に伝えるようにと私たちにゆだねられた、すばらしい知らせです。

また、神様がご自身の子どもたち、すなわち真のクリスチャンになされる御業は、＜コリント人への手紙Ⅱ 9章14節-15節＞にあるように、受けるに値しないご好意で満ちています。

＜コリント人への手紙Ⅱ 9章14節-15節＞

14 また、あなたがたを通して神のすばらしい恵みを知り、真心から、あなたがたのために祈るようになるでしょう。

15 神のひとり子という、言い表せないほどすばらしい神様の贈り物を感謝します。

しかし、恵みがあるからといって、罪が教会に何の影響も及ぼさないということではありません。クリスチャンの人生にあるどんな罪であっても、それは教会全体に影響を及ぼします。

イエス様が＜マタイの福音書 16章11節-12節＞で語られたように、

＜マタイの福音書 16章11節-12節＞

11 パンのことなど問題ではないことが、どうしてわからないのですか。もう一度、はっきり言いましょう。わたしは、『パリサイ人とサドカイ人のパン種に気をつけなさい』と言ったのです。」

12 それでやっと弟子たちにも、パン種とは、パリサイ人やサドカイ人のまちがった教えのことだとわかったのです。

パリサイ人たちは愛のない律法と規則による束縛を教えていました。また使徒パウロは＜使徒の働き 7章26節＞で、モーセが同胞イスラエルの間に平和をもたらそうとした出来事を引用しています。

＜使徒の働き 7章26節＞

翌日、もう一度出かけて行くと、今度はイスラエル人同士で争っているのにぶつかりました。モーセは間に割って入り、『兄弟同士じゃないか。けんかなんかやめなさい』と押しとどめました。

イエス・キリストの教会においては、恵みが豊かにあふれ、イエス様はご自身の民を決して見捨てられません。しかしあらゆる教会の中で、特に兄弟姉妹のクリスチャンに対して告白されていない罪があるとき、聖霊なる神様は深く悲しまれます。

聖霊なる神様はなおそこにおられますが、神様が本来イエス様の羊たちに注ぎたいと願っておられる力を十分に現すことはできなくなってしまうのです。イエス様は＜マタイの福音書 5 章 23 節-24 節＞でそのことを教えられています。

＜マタイの福音書 5 章 23 節-24 節＞

23 ですから、神殿の祭壇に供え物をささげようとしている時、人に恨まれていることを思い出したら、

24 供え物はそのままにして、相手に会ってあやまり、仲直りをしなさい。神に供え物をささげるのはそのあとにしなさい。

イギリスの著名な聖書教師であり著述家でもある Neil T. Anderson は、「福音派の教会における最大の問題は、赦さない心である。」と語りました。

この問題の一部は、兄弟に罪を犯した、あるいは傷つけたクリスチャンの高ぶりですが、その兄弟に赦しを求めてへりくだろうとしません。その結果、イエス様が教えられた「まず兄弟と和解し、それから供え物をささげなさい」という御言葉に従っていないのです。

いいえ、私たちは、罪を犯したクリスチャンを通りで石打ちにすることはしません。しかし、悲しんでおられる聖霊なる神様は教会全体に影響を及ぼします。そして天の父なる神様は、ついにはご自分のすべての子どもたちに訓練をお与えになります。

聖書は＜ガラテヤ人への手紙 6 章 7 節＞で次のように語っています。

＜ガラテヤ人への手紙 6 章 7 節＞

思い違いをしてはいけません。神を無視することなどできません。人は種をまけば必ずその刈り取りもすることになるのです。

イスラエルの指導者たちは東の部族の礼拝の心を見る

＜ヨシュア記 22 章 21 節-27 節、30 節-31 節＞を読みます。

＜ヨシュア記 22 章 21 節-27 節、30 節-31 節＞

21 こう言われて、ルベンとガドとマナセの半部族の人々は弁明しました。

22・23 「神の神、主に誓って申し上げます。私たちは反逆するつもりで祭壇を築いたのではありません。主はご存じです。皆さんにもわかってほしいのですが、私たちは、焼き尽くすいけにえや、穀物の供え物や、和解のいけにえをささげるために祭壇を築いたものではありません。もしそうなら、幾重にも主にのろわれますように。

24・25 実は、イスラエルの神、主を愛すればこそ、このようにしたのです。それに将来、私たちの子どもが皆さんの子どもから、こう言われはしないかと心配だったのです。『どんな権利があつて、おまえたちはイスラエルの神様を礼拝するのだ。おまえたちと僕らは別々なんだ。主がちゃんとヨルダン川という境界を置いていらっしゃるではないか。おまえたちなんか主の民ではない』と。実際、息子の代になってから、私たちの子どもが主を礼拝するのをはばまれるかもしれませんから。

26・27 ですから、私たちも焼き尽くすいけにえや和解のいけにえ、その他のいけにえをささげて主を礼拝できることを、私たちと皆さんとの子どもに示す記念碑として、あの祭壇を築いたのです。そうすれば、私たちの子孫が、『おまえらなんか主の民ではない』などと言われることもないでしょう。

30 祭司ピネハスと随員は、ルベン、ガド、マナセの各部族から事情を聞いて、安堵しました。

31 ピネハスはこう言いました。「本日、私たちの真ん中には主がおられることが明らかになった。なぜなら君たちは、こちらが懸念したような主への罪を犯していないのだから。いやむしろ、私たちを滅びから救ってくれたのだ。」

今日のイエス様の弟子たちと東の部族

東の部族たちの勇敢で大胆な行動は、イスラエルの民の家族の中で誤解される危険を伴うものでした。しかし、この行動は彼らがヨシュアによって訓練を受けていたのは、単に戦いのための軍事的訓練だけではなく、霊的な戦いのためでもあったことを示しました。彼らの行動は、自分たちの家系の将来の世代において永続的な（忠実な）遺産を築くための歴史的な出来事を形づくるものでした。このことは＜ヨシュア記 22 章 26 節-27 節＞に示されています。

＜ヨシュア記 22 章 26 節-27 節＞

26 ・ 27 ですから、私たちが焼き尽くすいけにえや和解のいけにえ、その他のいけにえをささげて主を礼拝できることを、私たちと皆さんとの子どもに示す記念碑として、あの祭壇を築いたのです。そうすれば、私たちの子孫が、『おまえらなんか主の民ではない』などと言われることもないでしょう。

Oxford Languages Dictionary 英語辞典 (OLD) における「レガシー (Legacy)」の定義は「過去に起こった特定の出来事や行動、またはある人物の人生がもたらす、長く続く影響。」です。もう一つの意味として「財産としての遺産 (相続財産)」がありますが、ヨシュア記、そして聖書の多くの文脈においてこの語が示すのは、（物質的なものではなく）霊的な遺産（スピリチュアル・レガシー）です。

私たちの「遺産 (レガシー)」とは、この地上での生涯が終わった後に残る、私たちの良い行いまたは悪い行いの結果のことです。イエス様に親しく歩むクリスチャンにとって、この世を去り、天国においてイエス様の御前に凱旋した後も、地上に良いレガシー（信仰の証・遺産）が残されることでしょう。しかし、もしクリスチャンが自分の「遺産 (レガシー)」ばかりに心を向けすぎるなら、そこに 1 つのつまずきの危険が生じます。なぜなら、その人は容易に自分の行い——たとえそれが神様の恵みによってなされた良い行いであっても——に目を奪われ、「イエス様を直接見上げる（御顔を仰ぎ見る）」という（最も大切なこと）に心を注がないかもしれないからです。

このことについては、＜ヘブル人への手紙 12 章 2 節＞に教えられています。

＜ヘブル人への手紙 12 章 2 節＞

あなたがたの信仰の指導者であり教師であるイエスから、目を離さないようにしなさい。イエスは後にある喜びを知って、恥辱をものともせず十字架にかかられました。そして今は、神の王座の右に座しておられるのです。

イエス様は、私たちの心の焦点について、すばらしい教えをくださいました。イエス様が＜マタイの福音書 6 章 20 節-21 節＞で語られたときにそのことを教えてくださいました。

＜マタイの福音書 6 章 20 節-21 節＞

20 財産は天にたくわえなさい。そこでは価値を失うこともないし、盗まれる心配もありません。
21 あなたの財産が天にあるなら、あなたの心もまた天にあるのです。

ヨシュアの最後のメッセージ

＜ヨシュア記 23 章 1 節-5 節＞

1 主がイスラエルを敵から守り、彼らに勝利を与えてから、かなりの年月がたち、ヨシュアも老人になりました。

2 彼は、イスラエルの指導者である長老、裁判官、長たちを呼び、語りました。「私も、もう年をとった。

3 あなたがたは、私の生涯を通じて、主があなたがたのためにどれほどのことをしてくださったか、つぶさに見てきたはずだ。敵と戦い、この地を分け与えてくださったのもあなたがたの神、主である。

4・5 見てのとおり、私は、すでに征服した国々だけでなく、まだ征服していない国々をも各部族に分配した。ヨルダン川から地中海に至る全地域はあなたがたのものだ。主が必ず、現在そこに住んでいる人々を一掃し、約束どおり、あなたがたが住めるようにしてくださる。

私たちの現代社会では、「ずっと後の時」という表現は使われません。私たちは、年、月、日、時間、秒、さらにはマイクロ秒単位の時間を測ります。聖書学者たちが認めているように、もし約7年かけて約束の地における全体の平和が確立されたとすれば、この「ずっと後の時」は、ヨシュアはエフライムの丘陵地に自分自身の領地を定めており、おそらく何十年も後のことを指しているのでしょう。彼の年齢は110歳に近づいていました。

1 人の人の確信 —— 戦略的な自己の重要性

ヨシュアは、自らのすべての勝利が神様に依り頼むことによって得られたものであることを知っていました。しかし、ヨシュアの召しに神様の命令は、自らに与えられた賜物と、神様から授けられたあらゆる能力に確信を持つことが求められたこともヨシュアは知っていました。ヨシュアは、＜ヨシュア記1章6節-7節＞の神様の命令を常に心に留めていました。

＜ヨシュア記1章6節-7節＞

6ヨシュアよ、雄々しく立ち、勇気を出しなさい。りっぱな指導者になるのだ。わたしが先祖に与えると約束した地を全部、占領しなさい。

7強く雄々しくあつて、勇気を出しなさい。モーセが与えた律法をしっかりと守りなさい。そうすれば、あなたは成功する。

このことによって、ヨシュアの確信は単なる霊的な理念ではなく、日々の生活の中で、またそれぞれの戦いや勝利の場面で彼の力となりました。神様が約束されたのは「勝利」だけでした。全時間を主のためにささげる「フルタイムの奉仕」へと召された多くのクリスチャンたちは、「高慢になること」への恐れを抱きます。神様はご自身のリーダーたちに、大きな期待と、勇気に満ちた広がるビジョンを持つことを願っておられるからです。けれども、「罪、すなわち高慢、情欲、食欲、その他あらゆる罪を恐れること」では、罪を遠ざけることはできません。罪がクリスチャンの心を支配しないようにするのは、主への恐れと深い敬意（畏敬の念）です。

およそ10年前、私はあるルーテル派の牧師による説教を読みました。その説教の題は「私の戦略的自己重要性 (My Strategic Self-Importance)」というものでした。主イエス様は、その牧師に自身の「偽りの謙遜」、すなわち高慢を恐れるあまりの謙遜を示されました。しかし実際に高慢を恐れるあまりの謙遜は、「成功を恐れる心」へととなりました。彼の説教は、彼自身の人生を変えました。この啓示を受けてから、いわば彼は牧師としても説教者としても、以前より多くの実を結びはじめました。彼は常に神様の「戦略」を求めるために自分の計画をへりくだらせましたが、確信を持ちはじめました。まさに「1人の人の確信 (A MAN'S CONFIDENCE)」です。この「戦略的自己重要性 (Strategic Self-Importance)」は、本当に神様を敬う人の確信です。それは人間の戦略ではなく、神様の戦略（神様のご計画）に依り頼むものです。しかし神様は、私たちが「人間であり、かつ聖なる存在」であることを否定されません。このことについて、＜詩篇139篇14節＞を思い巡らすことができます。

＜詩篇139篇14節＞

こんなにも複雑かつ緻密に 仕上げてくださったことを感謝します。想像することもできないくらい、すばらしいことです。あなたのわざは驚くべきもので、私にはどうてい、理解することはできません。

それでは、召命を受けた牧師を含むすべてのクリスチャンは、「戦略的自己重要性 (Strategic Self Importance)」を持つ必要があるというこのルーテル派の牧師の言いたいことが理解できません。神様の子どもである1人ひとりが、牧会の務めに就いている人だけでなく、人生において神様から与えられた目的を持っています。

神様は、それぞれがこの地上で自分の高い召しを果たすように呼びかけておられます。私たちは皆、私たちがイエス様にお会いするその日まで、教会で続いている神様の壮大なご計画の中で非常に重要な存在です。私達は、ヨシュアは自らの「戦略的自己重要性」を理解していたことがわかります。神様は＜ヨシュア記1章6節＞でヨシュアに命じ、また約束されました。

＜ヨシュア記1章6節＞

6ヨシュアよ、雄々しく立ち、勇気を出しなさい。りっぱな指導者になるのだ。わたしが先祖に与えると約束した地を全部、占領しなさい。

ですからヨシュアは、＜ヨシュア記23章3節-4節＞で「私が打ち破った」と同様に語った時、誇り高ぶりませんでした。

＜ヨシュア記23章3節-4節＞

3あなたがたは、私の生涯を通じて、主があなたがたのためにどれほどのことをしてくださったか、つぶさに見てきたはずだ。敵と戦い、この地を分け与えてくださったのもあなたがたの神、主である。

4・(5) 見てのとおり、私は、すでに征服した国々だけでなく、まだ征服していない国々をも各部族に分配した。ヨルダン川から地中海に至る全地域はあなたがたのものだ。主が必ず、現在そこに住んでいる人々を一掃し、約束どおり、あなたがたが住めるようにしてくださる。

神様はヨシュアを通してご自身の約束を果たされました。そして、神様はあなたと私を通して、同じように神様の約束を成し遂げてくださいます。

忠実の遺産 — 神様は真実なお方

すべての「遺産」、すなわち「悪ではなく善のために永く残る影響」は、神様によって始められ、神様によって保たれ、そして神様によって完成されます。ヨシュアの遺産はそのことを私たちに教えています。この真理は、イエス様の血潮のもと新約聖書へと変わることなく生き続けています。

イエス様の「戦略的自己重要性」 — 十字架での死

主イエス様でさえ罪のない完全なお方でありながら、人間の本性をもっておられました。イエス様の人類への遺産は、人間の罪の赦しと永遠のいのちを贖い取るため、そして人類の強大な敵である悪魔に対する勝利をもたらすため十字架でのご自身の死という賜物です。

使徒ヨハネは、この真理を＜ヨハネの手紙I 3章4節-8節＞自らの手紙の中で明確に宣言しています

＜ヨハネの手紙I 3章4節-8節＞

4 罪を犯し続ける人は、神に逆らっているのです。罪はすべて、神のお心に反する行為だからです。

5 あなたがたは、キリストが人間となられたのは、私たちの罪を取り除くためであったことをよく知っています。また、キリストは何の罪も犯さず、どんな時にも、神のお心からそれなかったことも知っているはずです。

6ですから、もし私たちが、いつもキリストのそば近くにおり、従順に従うなら、罪を犯し続けた
りしないですみます。罪を犯す人々は、真の意味でキリストを知らず、キリストのものとなっ
ていないからです。

7愛する子どもたち。このことで、だれにも惑わされてはいけません。もし、あなたがたがいつも
善を行っているなら、キリストと同じように正しく歩んでいるのです。

8しかし、もし依然として罪を犯し続けるなら、それは悪魔の子になり下がった証拠です。悪魔
は、初めの罪以来、ずっと罪を重ねてきました。神の御子は、この悪魔のしわざを打ち破るため
に來られたのです。

この二重の使命を成し遂げるために、イエス様の「戦略的自己重要性」は、ご自身が過越の小羊
として死ぬために生まれたということでした。イエス様は、人間の罪に対する神様の怒りの杯を、
余すところなく飲み干すためにお生まれになったのです。

ゲツセマネの園で私たちはイエス様が完全に人でありそして完全に神様であられたことを理解し
ています。イエス様は、ご自身の「戦略的自己重要性」を意識しつつ、この神様の怒りの杯につ
いて祈られました。＜マタイの福音書 26 章 39 節＞を読みます。

＜マタイの福音書 26 章 39 節＞

三人にこう頼むと、イエスは少し離れた所に行き、地面にひれ伏して必死に祈られました。「父
よ。もしできることなら、この杯を取り除いてください。しかし、わたしの思いどおりにではな
く、あなたのお心のままになさってください！」

言い換えれば、「天の父のご計画（戦略）は、ほかの方法で成し遂げることができないのでしょ
うか？」とイエス様は尋ねておられたのです。

使徒ペテロは、＜マタイの福音書 16 章 16 節＞でイエス様のご本性を告白しました。

＜マタイの福音書 16 章 16 節＞

シモン・ペテロが答えました。「あなたこそキリスト（ギリシャ語で、救い主）です。生ける神
の子です。」

その後、イエス様はご自身の「戦略的自己重要性」を、＜マタイの福音書 16 章 21 節＞で弟子た
ちだけに明かされました。

＜マタイの福音書 16 章 21 節＞

その時からイエスは、ご自分がエルサレムに行くことと、そこでご自分の身に起こること、すな
わち、ユダヤ人の指導者たちの手でひどく苦しめられ、殺され、そして三日目に復活することを、
はっきり弟子たちに話し始められました。

この世界の基礎が据えられる前から、聖なる三位一体なる神様によって立てられていた神様のご
計画（戦略）——それは、神様ご自身の御子イエス様の死でした。したがって、＜エペソ人への
手紙 1 章 3 節-4 節＞にもあるように、それは永遠の昔からの神様のご計画（戦略）だったのです。

＜エペソ人への手紙 1 章 3 節-4 節＞

3 主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、天上のあらゆる祝福をもつ
て、私たちを祝福してくださいました。それは、私たちがキリストのものとなっているからです。
4 神はこの世界をお造りになる前から、私たちを、ご自分のものとして選んでくださいました。そ
して、神は私たちを、ご自分の目から見て、何一つ欠点のない、きよい者にしようとお定めにな
りました。

ゲツセマネの園で——すなわち、聖なる金曜日（グッド・フライデー）（イエス様が十字架にか
かられる）の前夜——天の父なる神様は、翌日に成し遂げられる十字架での死に関する最終的な

詳細を、愛する御子に再確認されました。御子の「戦略的自己重要性」とは、天の父なる神様に完全で十分な従順でした。そのことは<ピリピ人への手紙 2 章 8 節>に記されています。

<ピリピ人への手紙 2 章 8 節>

そればかりか、さらに自分を低くし、犯罪人と同じようになって十字架上で死なれたのです。

イエス様の「戦略的自己重要性」—福音を教えるための弟子をつくる

<使徒の働き 10 章 36 節-38 節>を読みます。

<使徒の働き 10 章 36 節-38 節>

36・37 イスラエル人に伝えられた神のみことばについては、すでにお聞きでしょう。全人類の主である救い主イエスによって、私たちが神と和解できるということです。この教えは、バプテスマのヨハネが語り始め、ガリラヤからユダヤ全土に広まりました。

38 ナザレのイエスは神の聖霊と力とに満たされて、すばらしいみわざを行い、また悪霊につかれている人たちをみないやしながら、各地を巡回されました。それは、神様がこの方と共におられたからだということも、きっとご存じでしょう。

イエス様の「戦略的自己重要性」には、イスラエル全土で行われた多くの奇跡を通して示された神様のあわれみと慈しみも含まれていました。イエス様の十字架での栄光が、イエス様の時代の人々が過ぎ去った後、十字架・復活・昇天の後に語り継がれなかったなら、世界全体にとってそれは意味を持たなかったでしょう。そこで神様のご計画（戦略）はこうでした。「イエスよ、十字架にかかる前に行き、弟子たちをつくりなさい！」そしてイエス様はその命令に従われました。

イエス様が天に帰られた後、最初のペンテコステ（五旬節）で聖霊なる神様を受けた後、これらの弟子たちは福音を地の果てにまで伝えました。彼らは、自らの戦略的自己重要性を理解し確信をもって従い勤勉でした。

これこそが「大宣教命令」でした。イエス様の弟子たちへのご計画（戦略）は、<マタイの福音書 28 章 19 節>の中にあります。<マタイの福音書 28 章 19 節>を読みます。

<マタイの福音書 28 章 19 節>

イエスは弟子たちに言われました。「わたしには天と地のすべての権威が与えられています。

すべてのクリスチャンは、イエス様のために弟子づくりに参加する役割があります。牧師や教師の第 1 の務めは、イエス様を信じている人たちがそれぞれに与えられた役割——すなわち自らの「戦略的自己重要性」——を果たし、教会を通してイエス様の栄光のために備えることです。

忠実の遺産は今自分の「戦略的自己重要性」を生きることによってのみ、天に召された後に残る影響のこと

すべての「遺産」、すなわち「悪ではなく善のために永く残る影響」は、神様によって始められ、神様によって保たれ、そして神様によって完成されます。ヨシュアの遺産は、このことを私たちに教えています。この真理は、イエス様の血潮のもと新約聖書の時代に引き継がれ変わることなく生き続けています。ヨシュアもイエス様も、神様から与えられた「戦略的自己重要性」を生き抜きました。イエス様はそれを完全に成し遂げられましたが、聖書は同時に、イエス様が人間としての苦悩と神様のご計画（戦略）との葛藤を実際に経験されたことも明らかにしています。あなたも同じです。しかし、祈りこそすべての勝利への道です。ゲツセマネの園でイエス様が祈りによって勝利されました。イエス様は、やさしくも揺るがぬ力強いあなたの羊飼いです。自分自身の「戦略的自己重要性」を本当に生きてしていると知ることは、日々あなたの信仰を高めてくれます。

しかし、あなたは「**Bruce** 牧師、私には自分の『戦略的自己重要性』を学び始める方法がわかりません。確信也没有ありません！」と感じているかもしれません。

「戦略的自己重要性」と勝利に満ちたクリスチャン生活への最大の障害は、死への恐れです。あなたは死を恐れていますか？以下の3つの実践が助けになります。

1.) 神様に祈り願ひ求めて確信を与えてもらう

＜コリント人への手紙Ⅱ 5章5節-8節＞

5 これこそ、神様が私たちのために用意してくださったことであり、その保証として、御霊を遣わしてくださったのです。

6 いま私たちは、確信をもって天で与えられる体を待ちこがれています。また、このように地上の体で過ごしている間は、イエスと共に過ごす、天国の永遠の家から離れていることもよく知っています。

7 実際に見ることによってではなく、信じることによって、これを事実と認めているのです。

8 ですから、少しも恐れませんが、むしろ、死ぬことは願わしいのです。それは、天の家に主と共に住むことを意味するからです。

2.) 聖書の言葉を祈りながら暗記する

＜ローマ人への手紙 14章8節＞

私たちは主のものであり、生きるにしても死ぬにしても主に従うのです。

3.) これらの聖書の言葉に感情が同意する前に恐れに打ち勝つ確信の行動を信仰によって歩むことから学び始める

あなたの遺産に励ましが必要な場合は、礼拝後に「リフトサイン」のところへ行ってください。誰かがあなたのために祈ってくれます。

祈りましょう。

聖餐式です。